

さんざんと抑留中のシベリア民主運動を回顧しましたが、かく言う私も抑留三年間、この運動に関心が全然なしではいられませんでしたが、先頭で旗を振ることもなければ、と言って、反動と見られるような動きはしなかった。私の処世術ともいうことです。こんな姿勢に対し、同志寺田は日和見的だと吊るし上げの一步手前までできていたことは分かてましたが、そのあたりを適当に泳いでいたことを今告白します。所詮はえせ非民主主義者だったということ。だが大方が、こんな者が多かったのではないですか？

#### 【執筆者の紹介】

筆者は「シベリアを語る会」の副会長であり、環璣会会長を務められ、その温厚の内に秘められた熱意と信念には魅せられるものがある。

また、財団法人全国抑留者協会大阪支部より本部評議員を委嘱されている。

(大阪府 杉山 森一郎)

## 雪のシベリア抑留記

大阪府 谷 詰 潔

この記録は「集団的毒殺の屍」と題して、私が身をもって体験したことを事実に基づき、半世紀前の記憶を懸命にたどり、本当は思い出したいくないが、私たち同年輩の皆さんが極寒の地でいわれなき苦役に連行され、一切れの黒パンと顔の映るスープでノルマ、ノルマに追い立てられ、寒さと栄養失調で倒れし友よ安らかに眠れと祈るのみ。

思えば無謀な負け戦に昭和二十(一九四五)年三月の春まだ浅き旧陸軍記念日に、赤紙一枚で善通寺の連隊へ仮入隊。すぐさま牡丹江の先のムウリン重砲兵五四七部隊臼砲隊へ連れていかれ、毎日爆弾を腹に巻き、敵の戦車に潜り込む練習ばかり。一カ月ばかりすると、本隊は本土防衛とばかり濟州島へ移動した。我々は足手まといとなり残されて、朝鮮とソ連と旧満

州との三角地帯の地名もわからぬ寄せ集め部隊で、馬の世話が終わるまで食事は許されない、いつも冷飯ばかり。

ある日、銃剣術の試合があり、私は古兵を十人負かした。これが認められ翌日より中隊長の当番兵に抜てきされた。それも長い日時ではなかった。間もなく北満の陣地では戦闘が始まっているらしいとの事、我々も戦時編成になり、近くの山に陣地構築に移動して暮合暮らしとなる。私は中隊の弾運び要員になる。ここでも私はうまく上官に取り入り隊長の当番兵になり楽をする。あまり成績を隊長が良くしたものだから、中隊の指揮班に配置換えをさせられる。これが結果的に命を永らえることになった。

指揮班の通信兵になれば前線の様子が無線を通して入ってくる。国境の守備隊は全滅に等しい打撃を受け撤退しているらしい。間もなく敵の戦車砲弾と迫撃砲弾が近くで炸裂し、部隊は大混乱に陥る。明治時代の重砲で応戦するが、一発撃てば百発飛んでくる。その最中、隊長が一中隊との連絡が取れなくなり、兵数人

で有線を敷設せよとの命令を受ける。通信兵六人を出発する。相変わらず頭上を迫撃砲弾が一方的に飛んでくる。やっとの思いで一中隊の陣地に着き、有線の敷設にきたと告げると隊長が、この陣地は朝までもたないからその必要はない、すぐに引き揚げると言う。仕方なく元来た道を引き返すことにする。途中に木屋があったので少し休む事にする。疲れと空腹で寝込んでしまう。朝方外が騒がしいので出て見ると、昨夜の一中隊の者が半数になり、傷つきながら引き揚げている。隊長が、敵が後を追っている、早く引き揚げろと言う。これは大変だ、機材一切をその場に投げ出し後を追う。敵の砲撃はますます激しくなる。小高い山に登り、我が陣地とおぼしき辺りを見れば跡形もない。くわばら、くわばら、やれやれひとまず命は助かったと顔を見合わす。炊事の兵一人に会い尋ねると、昨夜のうちに全員切り込みに行き、生死の程は不明とのこと。三人に小銃一丁で切り込みに行くとは何たる無法か、あきれてものが言えない。多分隊長の気が狂っていたことと思う。それでも隊長の命令は絶対なのか、

我が国の軍隊はすべてこれだ。間もなくあれだけ激しかった砲声がぼったりと止む。我々六人は大隊本部を日指して行くことにする。間もなく本部の方向でパンパンと乾いた銃声が盛んにする。誰かが、日本が負けた、終戦だと言う。先ほどの銃声は職業軍人どもが前途を悲観して、また生き残っても軍法会議にかけられる、ゆえに自殺したものと思われる。

間もなく山の切り通しで武装解除を受ける。夏服に帯革だけの身軽い服装、幾らか持ち物もあったが陣地へ置いたままゆえ何も荷物がない。また、何も食べない。この時から延々と敗残兵数万の死の行軍が始まる。先頭集団は何か食べ物もあるが後続集団は何も残っていない。仕方なくコウリヤンの茎をかじり飢えをしのぐ。大陸の冬は早い、九月になれば雪が降る。夏服ゆえ夜は寒くてたまらん。道端の家または橋の欄干など燃える物は片端から壊して夜の暖に備えて担いで行く。これには警戒兵も黙認していた。

何日歩いたか、今日は何日かわからない。野宿を重ねてただ黙々と歩くのみ。ある日、日が暮れて山の中

で寝ることになり、警戒兵の甲高い声で「ストイ（止まれ）」、「スパーーチ（寝る事）」、軍団は崩れるごとく倒れ込む。眠い、疲れている。だが何か臭い、ものすごく臭い。ほろきれを鼻に当てていつか眠る。余りの寒さに目覚めて立ち上がり、辺りを見回して愕然とする。何と何百という人馬の死体の真ん中に寝ていたのだ。夏の盛り、毒ガスによる表題の通り。集団的毒殺の屍である。防毒マスクを付けた者も中にはいたが、何の役にも立たない。戦争とはひどいものだ。戦争に勝者はない。近頃はらんしているテレビゲームのように格好のよいものでないことを知らず手段はないものか。瀕死の状態で牡丹江の壊れた兵舎にたどり着くと、どこから来たか敗残兵の群れであふれていた。また、安堵のためか気力の限界か、倒れる者が続出した。その死体を埋葬する体力のある者皆ゆえ、トタンに紐をつけて数人で引いて行き、少しの窪みに転がして帰る。明日は我が身か考える力はどうに失せていた。赤いコウリヤン飯にニンニク一個が出る。このニンニク一個は効いた。辺り一面は雪で、近くの川

は完全に凍っている。いったい何日歩いたか、数える事不可能なり。多分十月頃と思う。収容所では何もする事もなく、ただ支給される黒パンと薄いスープを分配するのに餓鬼道になる。手製の物差しで測って切り、また手製のはかりで量り、また、くじ引きをする。こんな毎日に明け暮れる。

年が変わり、三月頃ダモイ（帰ること）を告げられる。手荷物を持って広場に集まれるの指示が出る。皆喜び勇んで指示に従う。一列車千人単位で有蓋の貨物列車に詰め込まれる。日本に帰国するのなら少しの我慢も良いと皆が思った。外から鍵を掛け警戒がものすごく厳しい。少し変だと思うが、その時点で誰も疑わなかった。荒っぽく列車は北へ向いて走る、だまされた、悔しいがいかともしがたし。アムール川を渡り何度も入れ替えを繰り返して、最後は薪を炊いて走る列車に変わっていた。それでも樺太經由で帰るとかすかな希望を捨てられなかった。だんだん奥地に入ると線路の脇で作業をしている兵隊に出会う。お前たち何をしているのか、俺たちは祖国へ帰るのだと言うと、その

兵は悲しそうな声で、まだわからんのか、少し先で降ろされると言う。このときになりだまされていることに気づく。間もなく少し先で降ろされ、小さな丸太小屋に入れられる。監督に聞けば樺太の対岸だと言う。えらい所まで来たものだ。すぐに作業もなく薪集めなどしているうちに全員ものすごい下痢になり、丸太を渡した便所より立つこともできない。薬は全くない。

燃えた炭を下痢止めにして飲むも効き目なし。これにはソ連の監督も引率の将校も困り果て、元の牡丹江へ引き返すことになる。何日かして元の兵舎に来てみれば、あれだけいた者が人影まばら、ソ連のうそに乗せられ、つらい強制労働につかされ、ノルマ、ノルマに追い立てられ、またはわずかな食べ物の餌に釣られ、ノルマが上がるように仕向ける。よく考えてみれば、増した食べ物、全体の数は変わらないから、どこかで少なくなっている、これがソ連のやり方だ。

三月になり、ソ連の将校がうまいことを言う。お前たち弱兵は使えないから先に日本に返すと言う。またうそを言うと思つたが、従うより道はな

い。沿海州の対岸まで連れていかれた身なれば、なおさらなり。ともかく、またも有蓋の貨車に詰め込まれ、残留者羨望の眼に見送られ汽笛は鳴った。今度こそ南へ向いて走る事を念じつつ運を天に任す気持ちなり。しかし思いとは裏腹に汽車は北へ向かって走る。やはりうそであったか。だんだん古里は遠くなるばかり。途方もなくソ連は広い、行けども行けども殺風景な湿地帯ばかり。冬は零下四十五度、夏は摂氏四十五度、人の住める所ではない。延々一月余りでソ連の穀倉地帯で最も氣候のよいウズベスク共和国のタシケントに着く。三番目に大きい町で、住人はアジア系で、髪も黒く親しみが持てた。遠く望めば万年雪をかむったヒマラヤの裏側を望み、また麝気様を見ることがもできた。しばらくの間この地でレンガ積みやら畑の草取りなど軽作業をする。

いくら景色が良くても望郷の念は変わることはない。いかにすれば警戒兵の目を盗み野菜を持ち帰るかに腐心した。ある夜あまりの暑さに外で寝ていたときに、何か首に落ちたように思い、はねのけるため手に

首にやれば、サソリに刺され、一晚中うずいてたまらん。幸い小形のサソリゆえに命は助かった。早く明るいうちに見つければ焼いて食べたと思う。カエル、ウサギ、ヘビ、ネズミ、生きている物は何でも食べた。幾日かたち五十人単位でトラックに乗せられ、尻の皮がはげるほど揺られ一日じゅう走り、何十キロ四方人家ひとつない砂漠の真ん中に降ろされる。こんな砂漠にも木が生えている。この木を根元より倒して積み上げ、監督の検査を受ける作業につかされた。私は四国の田舎育ちゆえ余り苦にはならない。二、三時間もあればノルマを達成できた。しかし余り早く達成すれば翌日必ずノルマを上げてくる、これがソ連のやり方だ。都会育ちの者はノルマ達成に苦労をしていた。私は早く終われば近くの者を助けてやることもあった。日が暮れてもノルマの達成できない者も多数いた。そんな者のために一計を案じた。小高い丘の上にたき火をする、これを目当てに一直線に帰る。方向を間違えばたちまち狼の餌になり白骨化するのは時間の問題だ。

こんな砂漠にも楽しみはある。倒した木の葉を食べるにウサギが集まるから帰る時に輪を仕掛けて帰る。沢山いるものだから仕掛けた数だけ翌日かかっている。

これを煮て食べるが、塩はあるが砂糖がないゆえ全くうまくない。だから余り取らないことにした。他に地ネズミが沢山いた。これはうまいが捕獲するのに腐心した。天気の良い時に餌をあさりにネズミどもは小さい巢穴を出る。出ているすきに穴の入口に輪を仕掛ける。頃合いを見て大声をあげるとネズミども一斉に巢穴めがけて飛び込む。後へ引く事を知らないネズミどもを一網打尽に捕獲する。これも田舎育ちの生きるすべと思った。

帰国して大勢の方が雪の深い所で伐採やら鉄道建設に働かされ、また命を落とされて異国の土になった方の事を思えば、私はまだ恵まれていたとつくづく思う。

後は皆さんがたどったことと同じ思想教育をナホトカの海を前に後戻りしてなるものと必死に空耳を立てられたことと思います。友よ安らかに眠れ。

#### 【執筆者の紹介】

筆者は大正十三（一九二四）年十月三日、徳島県海部郡実喰町生まれ。

全抑協発足当時よりの会員であったが、大阪市内より現住所に転居され、その後連絡を断っていたが、最近偶然にも知人の紹介によりこの原稿を入手する機会を得た。その内容は抑留者として貴重な体験記であることに間違いない。

（大阪府 杉山 森一郎）

#### シベリア抑留記

兵庫県 芦田 史朗

#### エトロフ島守備隊

旅団命令により、エトロフ島の中央部ヒトカップ湾に面した重要な一地区を担当し守備する。

初め、水際において、「ラッコ島」の天険の地形を利用した水際撃滅作戦をとって、日夜陣地構築に全力